医療現場：看護部

テーマ：絡まりにくい点滴チューブ

■ 背景

- 入院患者には多くの場合、点滴チューブ（栄養や医薬品投与のため）がつけられる（症例によっては複数のケースもある）。
- 点滴バッグから刺入部までの点滴チューブが長いと、チューブが途中で絡まってしまうことがある。
- 絡まったまま動くと、点滴チューブが針刺部や点滴袋から抜けてしまうこともある。寝返りが打てないこともあるため、患者さんにはストレスとなる。
- 点滴チューブが抜去すると、患者さんは適切な医療措置が受けられないこととなる。また、ナースコールなどにより看護師はその対応に時間を取られるため、看護師の業務量が増えることとなる。

＜出典：看護roo!＞

■ 現状の長い点滴管

機能アイデア例

- イヤホンで使われるようなまとめる機能
- 点滴管の長さを簡便に調節する機能
- 安価であることが望ましい
- 結束バンドやねじりっ子より簡単に脱着できる
- 点滴管の素材や構造の工夫

■ 市場性

1日平均入院患者数は滋賀医科大学附属病院で468人（2021年度）、全国では121万人（2020年度）に上る（厚生労働省、https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/kanja/20/dl/kanjya-01.pdf）。仮に半数の患者で点滴が施されると仮定しても、全国では多くの患者が日々点滴治療を受けていると推定される。1個数円～数十円程度の製品としても大きな売り上げに結び付くと予想される。

■ 看護部ホームページ

http://sumsnurse.es.shiga-med.ac.jp/